【研究ノート】傷痍軍人のスポーツ大会とスポーツ活動の意義

小倉和夫

プロローグ

1964年に開催された第二回パラリンピック東京大会（正式名称は第13回国際ストーク・マンデビル競技大会）の日本選手団の中には，数名の戦傷者，すなわち第二次大戦に参戦して戦場などで負傷し，国立箱根療養所で療養していた旧帝国軍の軍人が含まれていた。

しかし，それ以降，日本選手団には戦争で負傷した「軍人」がパラリンピックに参加していたという記録はなく，また，自衛隊の隊員で公務中に負傷した隊員がパラリンピックに参加したという記録もない。

他方，米国，英国などでは，ベトナム戦争，イラク戦争，アフガニスタン戦争などに従軍し，負傷した兵士がパラリンピックに参加しており，大会及び国によっては，選手団の10％前後がそうした傷痍軍人によって占められている[1]。これらの傷痍軍人には，多くの国で，通常の恩給のほかに，スポーツ活動と大会参加のための特別プログラムが用意されている。また，国際的な規模での傷痍軍人スポーツ競技大会も開かれている。

そうした国際大会の代表的なものに，Invictus（ラテン語の「征服されざる」，或いは「不敗の」を意味する形容詞）Games が存在する。

この大会は，いわば，戦傷者オリンピックとも呼ばれ得るもので，パラリンピックの在り方を考える上で無視できない存在と考えられる。

本稿では，この Invictus Games（以下「IG」と略す）の態様とその意義，また，IG の開催を促す源となった，米国主導で実施されているもう一つの傷痍軍人スポーツ大会ともいえる Warrior Games についてもその概要と意義を考え，さらに，日本における傷痍軍人のスポーツ活動の歴史を振り返ってみたい（なお，ここでは「傷病兵」「戦傷者」「傷痍軍人」という用語を，特に特記せざる限り，同意義の言葉，すなわち，現役・退役を問わず，軍役・軍務中に怪我あるいは病による後遺的な身体障がいや疾病を抱える者を指すものとして使用した）。

Ⅰ．Invictus Games

2013年，米国において米国の戦傷者のためのスポーツ大会である Warrior Games を参観した，英国のハリー王子（Prince Harry，正式名は the Duke of Sussex）が，大会に感銘を受け，英国でも同様のスポーツ大会の開催をよびかけ，翌年ロンドンで IG が開催されたという経緯がある。

この大会の目的は，軍務で負傷あるいは病（ill）にかかった人が，負傷や病にもかかわらず，スポーツの力によって，回復，復帰を図ることができ，同時にそうした姿を見る一般国民が，国家のために尽くした兵士たちへの理解と敬意を再確認することにあるとされる[2]。そして，この大会への参加者が共有すべき「精神」として，「決して屈しない魂（unconquerable soul）」）が重視されている（注１）[3]。

１．大会概要

IG は，これまでに５回開催されてきた。開催場所，時期，参加者，競技などについての詳細は次表の通り（太字は初参加国）。

ロンドン大会（英国）[4]

日時	2014年９月10日～14日
開催場所	ロンドン市内にある Queen Elizabeth Olympic Park[5]
参加国	13カ国（アフガニスタン，オーストラリア，カナダ，デンマーク，エストニア，フランス，ジョージア，ドイツ，イタリア，オランダ，ニュージーランド，英国，米国。イラクは招待されたものの参加しなかった[6]）
参加選手数	413人
競技	９競技（アーチェリー，陸上競技，インドア・ローイング， パワーリフティング，ロードサイクリング，シッティングバレーボール，水泳，車いすバスケットボール，車いすラグビー）並びに運転技術と速度を競う「Jaguar Land Rover Driving Challenge」（大会の主要スポンサー提供）

オーランド大会（米国）[7]

日時	2016年５月８日～12日
開催場所	オーランド市内のウォルト・ディズニー・ワールド・リゾートランドにあるスポーツ施設 ESPN Wide World of Sports complex[8]
参加国	15カ国（アフガニスタン，オーストラリア，カナダ，デンマーク，エストニア，フランス，ジョージア，ドイツ，**イラク**，イタリア，**ヨルダン**，オランダ，ニュージーランド，英国，米国）[9]
参加選手数	485人
競技	10競技（ロンドン大会の９競技に加え「車いすテニス」）並びに「Jaguar Land Rover Driving Challenge」[10, 11]

トロント大会（カナダ）[12]

日時	2017年９月23日～30日
開催場所	トロント市内のスポーツ施設
参加国	17カ国（アフガニスタン，オーストラリア，カナダ，デンマーク，エストニア，フランス，ジョージア，ドイツ，イラク，イタリア，ヨルダン，オランダ，ニュージーランド，**ルーマニア**，**ウクライナ**，英国，米国）[13]
参加選手数	539人
競技	11競技（オーランド大会の10競技に加え「ゴルフ」）並びに「Jaguar Land Rover Driving Challenge」。また，カナダ内の32の軍事基地を回るリレーが実施された[14]。

シドニー大会（オーストラリア）[15]

日時	2018年10月20日～27日
開催場所	Sydney Olympic Park とシドニー港を含めたシドニー市及び郊外
参加国	18カ国（アフガニスタン，オーストラリア，カナダ，デンマーク，エストニア，フランス，ジョージア，ドイツ，イラク，イタリア，ヨルダン，オランダ，ニュージーランド，**ポーランド**，ルーマニア，ウクライナ，英国，米国。さらに車いすラグビーに参加するカナダ・ポーランドの合同チーム「Unconquered」が結成された[16]）[17]
参加選手数	491人
競技	12競技（トロント大会の11競技に加え「セーリング」）並びに「Jaguar Land Rover Driving Challenge」[18]。

ハーグ大会（オランダ）[19]

日時	2022年４月16日～22日
開催場所	ハーグ市内の Zuiderpark，Sports Campus[20]
参加国	16カ国（オーストラリア，**ベルギー**，カナダ，デンマーク，エストニア，フランス，ジョージア，ドイツ，イタリア，イラク，オランダ，ポーランド，**韓国**，ルーマニア，英国，米国）[21]
参加選手数	500人強
競技	９競技並びに「Jaguar Land Rover Driving Challenge」。ゴルフ，車いすテニス，セーリングの実施なし[22]。

シドニー大会（2018）後，GI は２年ごとに開催されることとなったため，ハーグ大会（2022）は当初2020年の開催を予定していたが，新型コロナウイルス感染症拡大のため延期された[23]。

２．競技の特徴

IG の競技は，パラリンピックと類似して，障がいの程度あるいは身体機能の程度に応じて，いわゆるクラシフィケーション（IG では Categorization と呼ばれる）が行われているが，パラリンピックほど細かいクラシフィケーションがなされていない競技が多い。また，ほとんどの競技に「オープン」というカテゴリーが設けられており，このカテゴリーには，極めて軽い障がい，PTSD 等の精神疾患のある者なども参加できることとなっているところに，パラリンピックとは異なる一つの特徴がある。

また，大会ごとにルールの運用に差はあるが，アーチェリーのリカーブ種目には，いわゆる「初心者カテゴリー」が設けられている。例えば，2017年９月23日～30日開催のトロント大会では，2016年５月15日以降にアーチェリーを始めた人を対象としていた[24]。視覚障がい者に対しては，自転車のタンデム種目並びに陸上のトラック種目に特別なクラスが設けられている[25]。

なお，総じて IG では，身体障がいのみならず，戦闘行為などの影響による PTSD などの精神疾患からの回復の一助としてのスポーツの役割が重視されており，上述の「オープン」カテゴリーはそうした考え方の表れとみられる。

また，2016年のオーランド大会では，ジャガー・ランドローバー車いすラグビーマッチというエキシビション・マッチが設けられ，そこには著名な健常者が参加したとされている[26]。

3．参加者の声から浮かび上がるIGの特徴
―パラリンピックとの比較を中心に―

IG参加者のインタビュー記録や参加者の残したコメントを概観すると，IGの特徴として次のような点が浮かび上がる。

① IG参加者は，自己が障がいを受けた原因あるいはその状況について，共通の体験（戦闘体験あるいは軍務中の事故など）を持っていることが多く，大会参加者には競技の「選手」同士，或いは障がい者同士としての一体感を越えた連帯意識があることが特徴である。たとえば，豪州の兵士としてアフガニスタンに派遣され負傷し，後に，ロンドン大会に重量上げ選手として参加したオーストラリア人のフィル・トンプソン（Phil Thompson）は，大会で自分が一番好んだ事は「仲間意識（camaraderie）」であると述べている[27]。戦闘行為でなくとも，イタリアの空軍兵士ファビオ・トマスロ（Fabio Tomasulo）のように自動車事故で負傷した後，ロンドン大会にアーチェリー選手として参加した者も，「スポーツ精神もさることながら，（参加者）一同には皆兵士として負傷したものであるという兄弟精神（brotherhood）があった」としている[28]。同様のコメントは，アフガニスタンで右目を負傷し，後に，ロンドン，オーランドの両大会にオランダチームの一員として参加したラーモン・ツォンダーファン（Rahmon Zondervan）など多くの参加者が行っている[29]。

こうした参加者間の連帯感は，単に戦傷者或いは戦病者としての体験の共有という共通項を越えて，かつての戦場と同じく，今はスポーツにおける勝利という共通目的に向かって再びともに行動をしているという意識によって一層強くなるものと思われる[30]。

また，そうした連帯感は，時には，戦闘における同盟国同士の助け合いの精神を，国際スポーツ競技大会においても感得できるという点からも一層強まるのであった[31]。

加えて，戦争を体験した軍人は「戦死した仲間への思い」を共有する。言い換えれば，生き残った自分たちが，負傷や病を克服してスポーツ競技に参加することは，いわば死者とともにあることの象徴的行為であるとの心情を抱く参加者もいること[32]に注目すべきであろう。

② IGのもう一つの特徴とも呼べるものは，愛国心との関連である。IGへ参加する

のは，かつて軍人として「国のため」に戦った，あるいは軍務についていた人々である。それらの人々は，当然，「国のために」働いたことに誇りを持っている。障がいや病によって軍務を離れたこれらの人々にとり，IG に出場して国を代表することは，再び国に奉仕する気持ちを奮い立たせるものとなる。この点を，ソマリアで負傷し，同じくオーランド大会に出場したイタリアの選手ジャンフランコ・パジラ（Gianfranco Pagila）も「あらたに国に奉仕できた」と語るのであった[33]。

中近東で従軍後，訓練中に負傷したカナダの兵士クリスティーン・ガーシァ（Christine Gauthier）は，オーランド大会に出場し，パワーリフティングとインドア・ローイングで金メダルを獲得したが「自分にとって重要なのは，首にかけた金メダルではなく，カナダが一位になることだ。自分にとって最高の瞬間は，国歌が演奏されるときだ」と語った[34]。ここには，正に，IG が愛国心を再び燃えたたせる刺激となることが示されている。

③　他方，戦争あるいは類似の戦闘行為において傷を負った者は，名誉の負傷として勲章の対象にもなれば，敗北者に近い心境に陥ることもあり，いずれの場合も，負傷した兵士は，ややもすると，自らを「戦傷者」と自己定義しがちである。しかしながら，IG の如きスポーツ大会に出場することにより，自らを「戦傷者」ではなく，「スポーツ選手」として定義づけることができるようになる。とりわけ，かつて職業軍人であった者が，スポーツ選手を生業とし，いわばプロ選手となれば，自己の再定義は容易となる。アフガニスタンでの戦闘で，銃弾を受けて負傷したデイビッド・ワイズマン（David Wiseman）が「戦傷者（wounded soldier）という自己定義を離れ，もっと前向きな自己定義ができるようになった」と語るとき[35]，そこには，IG のもう一つの意義が示唆されているといえよう。

④　上記③の点とも関連して，ドイツの軍人の IG 参加者の声は，若干他国のものとは異なっているのではないかと見る向きもある。それは，ドイツにおいては，長い間戦争に対する嫌悪感が持たれ，兵士はややもすると白い目で見られるところがあり，そのため戦傷者は，社会的に必ずしも称賛や同情の対象とならないきらいがあったとする見方があるからである。そうした状況下であればあるだけ，IG で活躍したアスリートとなれば，それは軍務を離れてあくまで個人的な業績となり，評価される。それが選手個人にも跳ね返って，自己を戦傷者として考えずに，アスリートとして見ることとなり，家族との関係においても素直な対応ができるようになるケース（アフガンで負傷し，後にインドア・ローイングに出場したカイ・シースラ（Kai Cziesla））もあるとする見方につながる[36]。ここでも，ある意味で IG は，戦傷者自身の自己再定義，そしてまた社会的な再評価が行われる触媒になっている

と考えることができよう。

しかしながら，このケースについての記述は，本人自身によるものではなく，インタビューした第三者の解釈によるものであり，必ずしもドイツの傷痍軍人一般にあてはまるとは考えられない。それというのも，現在ドイツでの連邦軍への国民感情をみると，軍をとても重要あるいはどちらかと言えば重要と考える国民は，全体で70％を越えているとみられるのみならず，IG に参加するドイツ選手も2016年大会21人[37]，2017年大会20人[38]，2018年大会19人[39]，2022年大会20人[40]のように20人前後に上っているからである。

いずれにしても，第二次大戦の同じ敗戦国である日本にとっては，現在のドイツにおける傷痍軍人の取り扱い，とりわけ，負傷者のリハビリにおけるスポーツ活動の位置づけについては，今後参考とすべき点があるものと思われる。

Ⅱ．Warrior Games

米国では，1950年代から傷痍軍人を中心に車椅子スポーツが盛んとなり，1957年には，全国車椅子（スポーツ）大会（National Wheelchair Games）が開催されるようになった。こうした動きを背景として，米国傷痍軍人省は，ちょうど国際障害者年であった1981年にヴァージニア州リッチモンドで第一回全国退役軍人車椅子大会（National Veterans Wheelchair Games）を開催した[41]。

その後，イラク戦争，アフガン戦争などを通じ，傷痍軍人の数が激増したことも一つの大きな要因となり（注２），傷痍軍人のためスポーツ活動を奨励する特別プログラム（Military Adaptive Sports Program）が2008年に開始された[42]。また，米国オリンピック委員会（現米国オリンピック・パラリンピック委員会）は，国防省とともに，傷痍軍人のパラリンピック参加を支援する体制を整備した[43]。

こうした一連の動きが刺激となって，2010年来，傷病兵のスポーツ大会である Warrior Games（以下「WG」と略す）が開かれるようになった。

累次の WG の大会の概要は次の通りである。米国軍については陸軍・海軍・空軍・海兵隊・特殊作戦軍別にチームに分かれ参加し，米国以外の国が参加している場合は国ごとにチームとして参加している[44]。

2010年大会[45, 46]

日時	2010年５月10日～14日
場所	コロラド州コロラドスプリングス
参加選手数	200人
競技	７競技（アーチェリー，サイクリング，シッティングバレーボール，射撃，水泳，陸上競技，車いすバスケットボール，引用文献では，円盤投げ，砲丸投げを陸上競技（track and field）に含まず併記し，９競技としているがここでは同二種目を陸上競技に含み７競技とした）。この他，各競技の優勝者が，“Ultimate Warrior”の称号を競って争う五種競技がある。
参加国	米国のみ

2011年大会[47]

日時	2011年５月16日～21日
場所	コロラド州コロラドスプリングス
参加選手数	200人超
競技	７競技（アーチェリー，サイクリング，シッティングバレーボール，射撃，水泳，陸上競技，車いすバスケットボール）（“Ultimate Warrior”競技の有無は不明）
参加国	米国のみ

2012年大会[48]

日時	2012年４月30日～５月５日
場所	コロラド州コロラドスプリングス
参加選手数	200人超
競技	７競技（前大会と同じ），Ultimate Warrior
参加国	米国のみ

2013年大会[49, 50]

日時	2013年５月11日～16日
場所	コロラド州コロラドスプリングス
参加選手数	約200人
競技	７競技（前大会と同じ），Ultimate Champion
参加国	２カ国（米国，英国）

2014年大会[51]

日時	2014年９月28日～10月４日
場所	コロラド州コロラドスプリングス
参加選手数	250人
競技	７競技（前大会と同じ），Ultimate Champion
参加国	２カ国（米国，英国）

2015年大会[52, 53]

日時	2015年６月19日～28日
場所	ヴァージニア州クワンテイコ
参加選手数	250人
競技	７競技（ただし，各競技における種目数は増加。また一部の資料では，競技数を８としているが，これは，陸上競技をトラックとフィールドに分けて数えたため。なお，車いすラグビーが特別観覧競技“Exhibition Sport”として行われた），Ultimate Warrior
参加国	２カ国（米国，英国）

2016年大会[54, 55]

日時	2016年６月15日～22日
場所	ニューヨーク州ウエストポイント
参加選手数	250人
競技	７競技，Ultimate Champion
参加国	２カ国（米国，英国）

2017年大会[56, 57]

日時	2017年７月１日～９日
場所	イリノイ州シカゴ
参加選手数	265人
競技	７競技，Ultimate Champion
参加国	３カ国（米国，英国，豪州）

2018年大会[58, 59, 60]

日時	2018年６月２日～９日
場所	コロラド州空港アカデミー
参加選手数	約300人
競技	10競技（新たに，インドア・ローイング，重量挙げ，タイムトライアル・サイクリングが正式競技となる），Ultimate Champion
参加国	４カ国（米国，英国，豪州）

2019年大会[61]

日時	2019年６月21日～30日
場所	フロリダ州タンパ
参加選手数	約300人
競技	13競技（新たに，ゴルフ，車いすテニス，車いすラグビーが正式競技となる），Ultimate Champion
参加国	６カ国（米国，英国，豪州，カナダ，デンマーク，オランダ）

2022年大会[62]

日時	2022年８月19日～28日
場所	フロリダ州オーランド
参加選手数	約300人
競技	12競技
参加国	３カ国（米国，カナダ，ウクライナ）

なお，2020年大会と2021年大会は，新型コロナウイルス感染症拡大の為，延期された。

主催は，2010年～2014年は米国オリンピック委員会，2015年以降は，海兵隊，陸軍，海軍，空軍，特殊作戦軍の持ち回りとなっている[63]。

また，開催場所として，スポーツ施設の他にも軍の施設が用いられており，通常は公開されていない基地の内部を一般人に見学させる目的もあわせ持っていると考えられる[64]。

2019年の大会を例に取り，公式『Rules and Classifications』[65]及び競技成績[66]を見ると，次のような特徴を見出すことができる。

肢体不自由以外に，障がい別のクラス分けが行われている競技種目としては，視覚障がいによるクラスがある。視覚障がい者が参加できる競技種目には，アーチェリー（コンパウンド），自転車（タンデム），インドア・ローイング（１分，４分レース），陸上競技のフィールド（円盤投げ，砲丸投げ），トラック（100，400，800，1,500メートル走（伴走者あり））などが挙げられる。

また，男女の区別なく参加できる競技としてはアーチェリー個人・団体，射撃個人，自転車（ロード）団体・タンデム，ゴルフ団体，シッティングバレーボール，車いすバスケットボール，車いすラグビー，車いすテニスがあり，陸上競技のトラックと水泳には男女混合種目のリレーがある。

なお，ゴルフにおいては，スコアが同じであれば，同等に金メダル，銀メダル，銅メダルが与えられるため，複数人が同じ色のメダルを獲得している。

また，クラシフィケーションについてはパラリンピックを参考としながらも，同時に，障がいの程度にかかわらず参加できる「オープン」クラスが存在する[67]。

因みに，米国軍隊での近年における戦傷病者の多くは，外傷性脳損傷（TBI）を持つ者が多く，2011年には約32万人，脊髄損傷は約6,000人，重度の四肢切断者は2017年で約1,600人，視覚障がい者は2015年には265人とされている[68]。それらの人々の扱いが重要となっている。

傷病兵でWGに出場できる選手が，どの程度パラリンピックに出場できるかについては，WGのアメリカ人参加者245人のうち，114人（47%）がパラリンピックに出場可能という試算がある[69]。

上記のようなWGの内容をみると，そこには，米国の「軍人」の大会としての性格が色濃く滲み出ていることがわかる。すなわち，

① 原則として毎年開催されており，しかも，陸軍，海軍，海兵隊，空軍，特殊作戦軍の持ち回り開催であり，傷病兵の士気向上という目的のほかに，同時に，いわゆる軍間の連携と相互の競争意識の向上などが意図されていること

② 開催場所が，多くの場合軍事基地や軍の施設であることは，軍人の家族たちの軍に対する親近感を強め，また，一般人の軍施設への理解と関心を深める目的をも合わせもっているとみられること

③ 近年数カ国の参加があるとは言え，圧倒的に米国中心であり，開催場所も米国国内にとどまっていること

④ 厳格なクラシフィケーションにこだわらず，むしろ競技に参加することに重点を

置いているとみられること

⑤　傷病兵及びその家族同士の連帯意識の強化に役立つことの意義が重視されていること，などである。

Ⅲ．日本における戦傷者スポーツ活動の略史

第二次大戦後，日本では，いわゆる戦傷者あるいは傷痍軍人は新たに生じていないが，歴史的には傷痍軍人の処遇の問題が存在し，また，障がい者となった兵士，軍人のリハビリの一環として，スポーツ活動が行われてきた。その様態と今日的意義を考えてみたい。

我が国で傷痍軍人の療養は，先ず，日露戦争後，1906年（明治39年），東京に創設された「廃兵院」にはじまった。同院においては，刺繍，細工などの職業訓練も行われたが，日露戦争で，戦傷し障がい者となった者（当時は「不具廃疾者」と呼ばれていた）が17,000人余りに上ったにもかかわらず，廃兵院設立時に入院を希望した者は僅か14人であり，この施設において，スポーツ活動が行われたという記録は見出しがたい[70]。

その後，1934年（昭和９年），廃兵院は「傷兵院」と名前をかえ，同時に，主として貧困救済を目的としていた従来の路線を変更，重傷で保護が必要な者のみを収容することとし[71]，1936年（昭和11年）には神奈川県足柄下郡に移転した[72]。

1938年（昭和13年）には，傷兵院の所属先である厚労省の外局である傷兵保護院が「傷痍軍人職業再教育事業概要」を発行した[73,74]。以下がその趣旨の一部である[75]。

> 従来四肢身体に欠陥を持つものは自らも社会から不具者として別個な取扱ひを受けるものと考へ，身体的条件以上に精神的な苦悩を持たざるを得ない状態に置かれたのであったが，かかる観念を傷痍軍人自身も持ち，又周囲の人々も持つことは最も避けねばならないことである。何故ならば戦闘によって不幸傷痍軍人となった者は身体に欠陥を持ち，健全なる人間と異なる状態に置かれたことは事実であるが，生来の不具廃疾者では決してなく，人一倍の健全たる身体を持って居たものが国家の為，身を挺して忠を尽くし以て傷つき倒れたのであるから，これを一言の下に一般不具者と同列に連ねることは余りにも当を得ぬ誤れる観念である。而して従来の不具者に対する悪しき観念は主としてその生活能力の薄弱より来ったのであり，而して生活能力の薄弱とは換言すれば職業生活への適応困難と言ふことを意味するものである。
>
> ここに傷痍軍人に職業再教育によって職業生活への復帰を可能ならしめたならば，

戦闘による名誉ある傷痍と言ふ輝かしき事実と相俟って，職業軍人自身の気持も，又一般社会の者も「不具者」なる観念を捨て「光輝ある人間」として遇することは疑ひなきことであって，この故に「人間的」或は「倫理的」見地よりして戦業再教育に必要性と必要性を見出し得るものである。

ここで，いささか長文の引用を行ったのは，この記述にIGやWGなど，今日の米国，英国などにおける傷痍軍人のためのスポーツ活動にも共通する社会的問題が潜んでいるからである。すなわち，傷痍軍人は，国家のための戦闘行為によって負傷した，いわば名誉の負傷者であり，先天的にあるいは他の理由によって障がい者となった者とは，違う背景をもっており，また，それだけに，特別に扱うべきとの考え方である。

こうした考え方は一見もっともに聞こえるが，「一般の」障がい者から見れば，なぜ傷痍軍人だけが特別に扱われるのかという不満が生じ得る。とりわけ，パラリンピックのように，障がいの「原因」を問わず，ただ障がいの「程度」によって競争条件を等しくして競技を行う大会においては，傷痍軍人だけが特別待遇を受けた後に出場するのは不公平であるとの声が上がる恐れがある。現に，イスラエル及びネパールのパラリンピック関係者のなかには，そうした声が国内で聞かれると述べる者がいたほどである[76]。

また，傷痍軍人にとっては，障がい者となった後にスポーツ活動，或いは他の領域で成果をあげることは，いわば戦場での成果に似たもので，名誉の回復あるいは再確認を意味することが多く，そこに特別の意味があるという考え方がある。この点については，傷痍軍人本人の心境もさることながら，傷痍軍人を社会がどう見るかという社会的側面を考慮せねばならないであろう。当時の日本においては次のような考え方が一般的であったと思われる。すなわち「厚生運動の趣旨よりすれば，成るべく多数の人が参加して団体的なる体力強化運動を勧奨すべきであるが，余りに過度の運動や，不具者といった『ひけ目』を感じせしめるものは努めて避くべきである」[77]という見方である。

1940年（昭和15年）には，傷兵院の一角に傷痍軍人箱根療養所が併設された。その後，1945年（昭和20年）には，太平洋戦争の終結により，傷痍軍人箱根療養所は厚生省の所管となり国立箱根療養所と名を変え，一般にも開放されることとなった[78]。その結果，1951年（昭和26年）には，脊髄損傷者90人の入所者がおり，そのうち73人が戦争犠牲者という状態となった[79]。

国立箱根療養所においては，とりたてて入所者のスポーツ活動が積極的に行われた形跡はないが，1941年（昭和16年）７月に行われた「箱根山嶽競歩章検定大会」などには，療養所の白衣の傷痍軍人が車椅子で選手を応援したといわれ，入所者がいわば「観客」としてスポーツ活動に参加する機会はあったとされている[80]。

他方，個々の療養施設における活動とは別に，日中戦争を一つの契機として全国的な傷痍軍人のスポーツ大会開催の動きが活発化し，1939年（昭和14年）３月には，大日本体育協会の主催の下に「傷兵慰問体育運動大会」が開催された。この大会には日中戦争での傷病兵など約150人が参加した。競技種目は，自転車運動，銃剣術，バスケットボール，相撲，剣道，綱引きであった。この大会では，同時に，病棟の患者チームと医師団チームの対抗サッカーといった，親善試合的な競技の他，傷病者へのいわば慰問もかねた健常者の競技として，大学対抗バレーボールなども行われた。戦時中には，同大会とは別に傷痍軍人による錬成大会が開かれており，そこでは綱引きや俵担ぎ，自転車競走，障害物競争などが行われていた[81]。

1965年（昭和40年）には，脊髄損傷者の療養のため，国立箱根療養所の一角に傷痍軍人用の病棟が併設された[82]。1960年代になると，国立箱根療養所では，当時の所長の熱意もあり「スポーツ訓錬」が実施されるようになった。ビニールプールが設置されたほか，アーチェリーが行われるようになり，所内には，アーチェリー専用練習場が設けられた[83]。こうした動きの結果，1963年（昭和38年）７月にロンドンで行われた第12回国際ストーク・マンデビル競技大会には，アーチェリー選手として，国立箱根療養所から安藤徳次が参加したのであった[84]。

他方，こうした箱根療養所の動きとは別に，一般的には，敗戦によって我が国における傷痍軍人の処遇は一変し，旧軍人に対して世論が厳しくなり，占領軍の非軍事化政策の下，旧軍人への恩給が停止され，生活保護法がほぼ唯一の援護施策となっていた。そのため，街頭にはいわゆる「白衣の街頭募金」を募る人々があふれ，社会問題となった[85]。こうした状況を改善することも一つの目的として[86]，1952年（昭和27年）11月，日本傷痍軍人会が結成された[87]。

同会が，その後，パラリンピックへの日本の参加，そして1964年（昭和39年）の東京大会の開催に貢献することとなったが，その経緯は次の通りである。

1953年（昭和28年）初頭より，米国傷痍軍人会から日本の関係者に対して，日本も世界傷痍軍人連盟（World Veterans Federation：WVF）への加入についての打診めいた動きがあった。これは恐らく，さかのぼること２年前，WVF の総会において，敗戦国の元軍人団体と平和促進のために提携すべしとの決議が行われていたことが背後にあったためと思われる[88]。

日本傷痍軍人会は，早速 WVF に加盟申請を行ったが，1954年（昭和29年）10月に来日した WVF 事務総長は，日本の旧軍人団体が戦犯釈放運動をしていることが問題となっており，日本の加盟について一致しての賛同は得難いとの趣旨を述べたため，日本側は一時加盟を断念した[89]。

しかし，1956年（昭和31年），米国の提案によって日本のWVFへの加盟が認められ，沖野亦男専務理事が日本代表（理事）となった[90]。沖野は，国際的な付き合いを通じて障がい者スポーツに関心を寄せ（注３），1961年（昭和36年），ストーク・マンデビル病院にグットマン博士を往訪したが，車椅子競技のみのパラリンピックの在り方に疑問を持ち，より全般的な身体障がい者スポーツ大会の開催準備を行うべきとの考えを持つにいたった[91]。1964年の東京パラリンピック大会に第二部が設けられ，車椅子競技以外の競技が行われた背景には，こうした沖野の活躍と彼の周囲の人々の考え方が影響していたと考えられるのである。そして，東京大会では，日本人選手53人のうち19人が国立箱根療養所の入所者であり[92]，また，その内２人（青野繁夫と松本毅）は傷痍軍人であった（注４）[93]，なお第二部に参加したドイツ人選手７人は全て傷痍軍人であった[94]。

1964年の東京パラリンピック大会で選手宣誓を行った青野は，次のような感想を残している[95]。

パラリンピックに参加して

愛と栄光の祭典たるパラリンピックの宜誓者の選を得て私は思い切り胸を張り，

宜誓　　私達は重度の障害を克服し，精神及び身体を錬磨して，愛と栄光の旗の下，限りない前進を期して，正々堂々と闘うことを誓います。

と，秋空に向って右手を高々と差し上げたのである。私の胸には傷痍軍人記章が光っていたはずである。

当日の開会式は，二十二カ国の国旗がはためく中，数千の観衆の中で，私が正面に対した時は，さすが緊張の極に達していたのであろう。自分で作った宜誓文であるし，当然何のためらいもなく口から出るものと予想していたが，緊張はそんな安易な気持を消し飛ばして了ったのも，今となっては生涯忘れ得ない思い出となった。

かつて砲弾雨飛の中を馳け（原文ママ）めぐり，いたたまれない緊張を味わったことのある私ではあるが，それとは違った意味の緊張であったと思われる。即ち今までの私達身障者乃至背損者（原文ママ）の置かれている立場や状態を，このパラリンピックを機に他の人々にも，私達を本当に理解して頂き現実的に政府の施策が，二歩も三歩も向上して貰わなければ，どうしようもないという宣言でもあると思ったからである。事実私達身障者，重度傷痍軍人の生活は，生易しいものではな

い。と言ってそれを克服しなければ社会から一層取り残されてしまうと同時に，自分自身もよりみじめで空虚なものとなってしまわざるを得ない。私は健全ならざる身体にも立派に健全な精神が宿ることを実証したい気持で一杯であった。そして皇太子及び美智子妃との握手に限りない感激を覚えたのである。

年令において柄にもなくと，いささか考えて出場したのであるが，外国の選手殊にドイツ，イギリス，イタリアの中に多くの傷痍軍人が名を連ねていて，通訳を交え楽しく交歓出来たのは幸いであった。（中略）

私達は軽い世間の同情を求めるものではない。大地に二本の足をかまえなくとも，立派に足の代りの車椅子がある。私達は，より国に尽した誇りを持ち，自らを一層強く持して今後に期待し，人間としてこの与えられた使命を果す如く努力したいと，この大会に参加して心に固く期した次第である。

ここには，IG や WG の参加者と同じく，ともに戦争で傷を受けた他国の選手との間での「仲間意識」がにじみでている。同時に，「国のために戦場で戦い，再びまた競技場で国を代表して戦ったこと」から来る誇りが感じられる。また，旧軍人で，しかも国のために戦って負傷した者に対する社会の同情や評価の乏しさに対する，自制された形ではあるが，特別の思いが潜んでいるように見受けられる。こうした感情ないし気持ちを，現在，日本の障がい者，健常者ともに，おしなべてどの程度深く理解しうるであろうか。その一方，IG や WG に参加する者，あるいは他国の傷痍軍人でパラリンピックに参加する者は，多かれ少なかれこうした感情の一部なりとも持ち続けることがしばしばであろう。

エピローグ

パラリンピックの原点が戦争にあるにもかかわらず，また，1964年の東京パラリンピックの形態，選手，準備段階での関与などの面で，目立たぬ形ではあったが，戦争の影が覆いかぶさっていたことを，現在，日本で意識している者は少ないように思える。

なお，こうした傷痍軍人のためのスポーツ競技大会が，一般国民の傷痍軍人に対する認識や連帯感にどこまで効果を及ぼしているかについては，Invictus Games Foundation が実施したトロント大会（2017）の効果についての調査報告『Lasting Impact』があり，これによれば，同大会は111カ国でテレビ放送され，またトロント市及び郊外では大会開催によって，退役軍人が各種の困難に直面している状況についての人々の理解が深まったことが統計上立証されたとしている。また，退役軍人の競技ス

ポーツ参加によって，傷痍軍人を「哀れ（sadness）」という感情で見る人々の割合が減ったとされている[96]。

我が国では，とかく，自衛隊員なり軍人が，そもそも負傷を負う事自体を問題視し，また，そうした社会的風潮もあって，負傷兵への手厚い擁護の必要性や，社会復帰，精神的リハビリ，そしてそのためのスポーツの役割などを広く論じることがほとんど見られないという現状は，他国と比べて特異な現象であることを認識しておくべきであろう。

注

（1）IG に関連する文書によく引用されている詩人ウィリアム・ヘイリーの詩の一節。

（2）主たる要因は，生存率の上昇と障がいへ者の補償の充実によって，「障がい者」登録が増えたことによるとみられる。なお，米国国防省発表の傷痍軍人数は，戦争による間接的障がいや後遺症を完全にカバーしていないとして，これらを加えるとアフガン作戦で障がいを負った者の数は８万人前後に上るとする研究もある（Crawford, N. C. and Lutz, C., 2019, Human Cost of Post-9/11 Wars: Direct War Deaths in Major War Zones, Afghanistan, and Pakistan（October 2001 – October 2019）; Iraq（March 2003 – Aug. 2021）; Syria（Sept. 2014 – May 2021）; Yemen（Oct. 2002-Aug. 2021）and Other Post-9/11 War Zone など）。

（3）沖野は，ブリュッセルで行われた WVF の総会に参加する日本代表に選任された際のインタビューにおいて，WVF の重要な目的の一つとして，「一般身体障害者とともに国際スポーツ大会を催すこと」を挙げている（昭和31年４月１日付「日傷月刊」）。

（4）青野繁夫は，1943年中国へ出征中に腰部を負傷，東京大会には水泳とフェンシング（団体）に出場した。松本毅は，1945年，フィリピンで米軍の捕虜となり，同年11月米軍キャンプ作業中事故に遭い脊髄を損傷する。東京大会ではアーチェリーに出場[97]。

参考引用文献

1　昇亜美子，2019,「パラリンピックと傷痕軍人：米国のケース」,『日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会紀要』，11，17-39.

2　Invictus Games Foundation, “Our Story,” https://invictusgamesfoundation.org/,（March 24, 2022）.

3　同上.

4　Starling, B., 2017, Unconquerable: The Invictus Spirit Kindle Edition, HarperCollins, 1.

5　Invictus Games Foundation, “London 2014,” https://invictusgamesfoundation.org/games/

london-2014/, (June 11, 2022).
6 Invictus Games the Hague 2020, "#20 – IRAQ IS LOOKING FORWARD TO THE INVICTUS GAMES," 15, May 2020, https://invictusgames2020.com/en/news/20-iraq-is-looking-forward-to-the-invictus-games/, (June 11, 2022).
7 Starling, Unconquerable, 2.
8 Invictus Games Foundation, "Orlando 2016," https://invictusgamesfoundation.org/games/orlando-2016/, (June 11, 2022).
9 Invictus Games Orlando 2016, "About the Participating Nations," https://invictusgames2016.info/countries/, (June 11, 2022).
10 Invictus Games Foundation, "Orland 2016," https://invictusgamesfoundation.org/games/orlando-2016/, (June 11, 2022).
11 Invictus Games Orlando 2016, "The Sports," https://invictusgames2016.info/sports/, (June 11, 2022).
12 Invictus Games Foundation, "Toronto 2017," https://invictusgamesfoundation.org/games/toronto-2017/, (June 11, 2022).
13 Invictus Games Toronto 2017, "Nations," http://www.invictusgames2017.com/nations/, (June 11, 2022).
14 Invictus Games Toronto 2017, "Sports," http://www.invictusgames2017.com/sports/, (June 11, 2022).
15 Invictus Games Foundation, "Sydney 2018," https://invictusgamesfoundation.org/games/sydney-2018/, (June 11, 2022).
16 Invictus Games Sydney 2018, "Unconquered and Ready for Some Wheelchair Rugby Action," October 23, 2018, https://www.invictusgames2018.com/unconquered-and-ready-for-some-wheelchair-rugby-action/, (June 11, 2022).
17 Invictus Games Sydney 2018, "Competitors," https://www.invictusgames2018.com/games-hq/competitors/, (June 11, 2022).
18 Invictus Games Sydney 2018, https://www.invictusgames2018.com/games-hq/sports/, (June 11, 2022).
19 Invictus Games Foundation, "The Hague 2020ne," https://invictusgamesfoundation.org/games/the-hague-2020/, (June 11, 2022).
20 Invictus Games the Hague, "the Events/Location," https://invictusgames2020.com/en/the-event/competitors/, (June 11, 2022).
21 Invictus Games the Hague, "the Events/Competitors," https://invictusgames2020.com/en/the-event/competitors/, (June 11, 2022).
22 Invictus Games the Hague, "Sports," https://invictusgames2020.com/en/sports/, (June 11, 2022).
23 Invictus Games Foundation, 2020, Impact Report, 1.
24 Invictus Games Foundation, 2016, Sport & Competition Management, 13, https://invictusgames.in.ua/files/Invictus%20Games%202017%20General%20Rules%20and%20Competition%20Format.pdf, (June 11, 2022).
25 Ibid., 16, 18.
26 Invictus Games Orlando 2016, Official Program, 51.
27 Starling, Unconquerable, 128.
28 Ibid., 173.
29 Ibid., 240.

30 Invictus Games Orlando 2016, Official Program, 34.
31 Starling, Unconquerable, 128.
32 Invictus Games Orlando 2016, Official Program, 27.
33 Ibid., 30.
34 Starling, Unconquerable, 59.
35 Invictus Games Orlando 2016, Official Program, 34.
36 Starling, Unconquerable, 218-219.
37 Deutscher BundeswehrVerband, "Sie treten auch gegen die Gleichgültigkeit an," May 11, 2016, https://www.dbwv.de/aktuelle-themen/blickpunkt/beitrag/sie-treten-auch-gegen-die-gleichgueltigkeit-an, (June 11, 2022).
38 Deutscher BundeswehrVerband, "Von der Leyen empfängt Sportler der „Invictus Games"," February 23, 2016, https://www.dbwv.de/aktuelle-themen/blickpunkt/beitrag/von-der-leyen-empfaengt-sportler-der-invictus-games, (June 11, 2022).
39 Förderverein zur Unterstützung der Arbeit mit Versehrten am Standort Warendorf e. V., "Der FUAV wieder dabei – Empfang zu Ehren der Teilnehmerinnen und Teilnehmer an den Invictus Games 2018 – ein anschließendes Event der besonderen Art – und ein neues Projekt," April 07, 2019, https://fuav.de/der-fuav-wieder-dabei-empfang-zu-ehren-der-teilnehmerinnen-und-teilnehmer-an-den-invictus-games-2018-ein-anschliessendes-event-der-besonderen-art-und-ein-neues-projekt/, (June 11, 2022).
40 Bundeswehr, „Invictus Games: Die Disziplinen der deutschen Athleten," April 16, 2022, https://www.bundeswehr.de/de/aktuelles/meldungen/disziplinen-deutsche-athleten-den-haag-5392692, (June 11, 2022).
41 昇，前掲書，18-19.
42 同上，22.
43 同上，25.
44 Rogers, A. E, Baker J., Beutler, A., Witkop, C. and Leggit, J. C., 2019, "Injury and Illness Surveillance During the 2016 Department of Defense Warrior Games: Review of Methods and Results," Military Medicine, 184 (11/12), e616.
45 Defense Visual Information Distribution Service, "NMCSD Wounded Service Members Compete in the Warrior Games," October 10, 2010, https://www.dvidshub.net/news/53576/nmcsd-wounded-service-members-compete-warrior-games, (July 11, 2022).
46 U. S. Army, "2010 Warrior Games- How To Get Involved," January 13, 2010, https://www.army.mil/article/32870/2010_warrior_games_how_to_get_involved, (July 11, 2022).
47 U. S. Army, "2011 Warrior Games Open," May 17, 2011, https://www.army.mil/article/56623/2011_warrior_games_open, (July 11, 2022).
48 Air Force's Personnel Center, "Warrior Games Set To Start," April 30, 2012, https://www.afpc.af.mil/News/Article-Display/Article/422289/warrior-games-set-to-start/, (July 11, 2022).
49 USO, "2013 Warrior Games Highlights," May 18, 2013, https://www.uso.org/stories/1282-2013-warrior-games-highlights, (July 11, 2022).
50 Defense Visual Information Distribution Service, "2013 Warrior Games," https://www.dvidshub.net/feature/2013WarriorGames, (July 11, 2022).
51 Defense Visual Information Distribution Service, "2014 Warrior Games," https://www.dvidshub.net/feature/2014WarriorGames, (July 11, 2022).
52 U. S. Army, "Army Announces 2015 DOD Warrior Games Team," April 28, 2015, https://www.army.mil/article/147265/army_announces_2015_dod_warrior_games_team, (July 11,

2022).
53 Department of Defense, “2015 DoD Warrior Games,” https://dod.defense.gov/News/Special-Reports/0615_warriorgames/, (July 11, 2022).
54 U. S. Department of Defense, “Warrior Games Draw to Close with a Bang,” June 22, 2016, https://www.defense.gov/News/News-Stories/Article/Article/809214/warrior-games-draw-to-close-with-a-bang/, (July 11, 2022).
55 U. S. Department of Defense, “Air Force Competitor Earns ‘Ultimate Champion’ Title at Warrior Games,” June 21, 2016, https://www.defense.gov/News/News-Stories/Article/Article/808346/air-force-competitor-earns-ultimate-champion-title-at-warrior-games/, (July 11, 2022).
56 Department of Defense, “2017 DoD Warrior Games,” https://dod.defense.gov/News/Special-Reports/0617_warriorgames/, (July 11, 2022).
57 National Recreation and Park Association, “The 2017 DoD Warrior Games Invade Chicago,” November 1, 2017, https://www.nrpa.org/parks-recreation-magazine/2017/november/the-2017-dod-warrior-games-invade-chicago/, (July 11, 2022).
58 U. S. Army, “2018 DoD Warrior Games Ultimate Champion Looks To Make His Mark Down Under,” October 22, 2018, https://www.army.mil/article/212786/2018_dod_warrior_games_ultimate_champion_looks_to_make_his_mark_down_under; https://www.usafa.edu/warrior-games-return-colorado-springs/, (July 11, 2022).
59 DefenseMediaNetwork, “DOD Warrior Games About to Begin,” June 19, 2019, https://www.defensemedianetwork.com/stories/dod-warrior-games-come-to-tampa/, (July 11, 2022).
60 Air Force Wounded Warrior (AFW2) Program, “Warrior Games,” https://www.woundedwarrior.af.mil/Events/Warrior-Games/, (July 11, 2022).
61 U. S. Army, “The 2019 DoD Warrior Games Conclude, Next Stop: San Antonio,” July 9, 2019, https://www.army.mil/article/224202/the_2019_dod_warrior_games_conclude_next_stop_san_antonio, (July 11, 2022).
62 Warrior Games, https://www.dodwarriorgames.com/, (July 11, 2022).
63 Warrior Games Tempa Ray 2019, “2019 Official Program,” 13, https://issuu.com/faircountmedia/docs/dod_warrior_games_2019_official_pro, (June 11, 2022).
64 Veteran. com, “The Warrior Games,” https://militarybenefits.info/warrior-games/, (June 11, 2022).
65 Warrior Games, 2019, Rules and Classifications DOD Warrior Games 2019, 1-120, https://www.bctsa.bc.ca/resources/Documents/Coaching/Para/Warrior%20Games%20Rules-DoD%202019%20WG.pdf, (June 11, 2022).
66 Warrior Games, “Games,” https://www.dodwarriorgames.com/games/result-2019/, (February 24, 2022).
67 Warrior Games, Rules and Classifications DOD Warrior Games 2019.
68 Lucarevic J., Danberg, S. and Fowler, J. Challenges Adopting Paralympic Classification to Military Adaptive Sports, 5.
69 Ibid., 11.
70 サトウタツヤ・郡司淳編，2014,「傷痍軍人・リハビリテーション関係資料集成」，１，六花出版，６，８.
71 同上，69-70.
72 箱根病院,「箱根病院の歩み」，https://hakone.hosp.go.jp/about/history/index.html,（2022年６月12日）.

73 同上.
74 上田早記子，2014,「傷痍軍人福岡職業補導所における職業再教育」，四天王寺大学紀要，58, 160.
75 サトウタツヤ他，前掲書，120.
76 両国のパラリンピック関係者の筆者への内話による.
77 サトウタツヤ・郡司淳編，2014,「傷痍軍人・リハビリテーション関係資料集成」，２，六花出版，25.
78 箱根病院，前掲書,「箱根病院の歩み」.
79 戦時下の小田原地方を記録する会，2020,「戦中戦後の箱根病院：パラリンピックに出場した傷痍軍人」，42.
80 矢野慎一，1997,「傷痍軍人療養所の歴史」. 小田原地方史研究会編『小田原地方史研究』，68.
81 厚生労働省，2019,「資料１　令和元年度しょうけい館事業実施状況報告」，57.
82 箱根病院，前掲書,「箱根病院の歩み」.
83 戦時下の小田原地方を記録する会，前掲書，48-49.
84 同上，49.
85 植野真澄，2004,「占領下日本の再軍備反対論と傷痍軍人問題：左派政党機関紙に見る白衣の傷痍軍人」，大原社会問題研究所雑誌，550，203.
86 しょうけい館，2016,「平成28年　夏の企画展　夫とともに歩んだ道：戦傷病者の妻として生きて」，２.
87 戦傷病者会館，1967，戦傷病者会館編「日本傷痍軍人会十五年史」，14.
88 同上，279-280.
89 同上，280.
90 日傷月刊,「加盟承認される－WVF 総会、日本は理事国となる」，1956年６月１日.
91 戦傷病者会館，前掲書，313-314.
92 カナコロ,「傷痍軍人がパラの原点　64年五輪の活躍が１冊に」，2019年８月30日，https://www.kanaloco.jp/news/social/entry-191862.html,（2022年７月３日）.
93 しょうけい館ホームページ,「ミニ展示『戦傷病者とスポーツ～パラリンピックに出場した戦傷病者～』」，https://shokeikan.go.jp/kikaku/kikaku_back202104.html,（2022年７月３日）.
94 戦傷病者会館，前掲書，323.
95 同上，323-325.
96 Invictus Games, “Lasting Impact,” http://www.invictusgames2017.com/lasting-impact/,（July 3, 2022）.
97 しょうけい館ホームページ，前掲書,「ミニ展示『戦傷病者とスポーツ～パラリンピックに出場した戦傷病者～』」.

【Research Note】The Significance of Sports Competitions and Sports Activities for Veterans with Disabilities

Ogoura Kazuo

The origins of the Paralympics lie in the Normandy landings at the end of the Second World War and the resulting rehabilitation of wounded servicemen and women, particularly those with spinal cord injuries. The first Paralympic Games in 1960 in Rome is also associated with the meeting of the World Veterans Federation held in Rome at around the same time. Furthermore, the 1964 Tokyo Paralympic Games had several participants who had been wounded as a result of World War II. In this way, the history of the Paralympic Games has been linked to war.

Even today, many countries, such as the US and the UK, have wounded servicemen and women among their Paralympic athletes. Some countries also provide special programs and funding for the participation of wounded servicemen and women in the Paralympics.

International sports competitions exist in part to inspire and encourage people who have been wounded in war. A typical example is the Invictus Games begun by Prince Harry of the British Royal Family, and the Warrior Games in the US, which inspired the Invictus Games. This article describes the history and current status of these two international competitions and includes a brief pre-World War II history of sports and physical education programs in Japan for those who were wounded in war.